

# デューイの命題論の応用

——デューイの質的思考理論をパターン化する試み その2——

佐々木俊介

## (一) これまでの経過

デューイの質的思考理論は、思考は各個人独自の一回限りのものであると主張する。このことについてはこれ迄何回か述べてきたが、これに対して教育方法の分野から主として次ぎの二つの批判が寄せられた。④質的思考理論が具体的に展開されているひとつながりの例を示してほしい。⑤思考が各個人に特有の一回限りのものであると云って済ましてしまうのは、教育方法の否定につながるのではないか。教育方法というのはその個性的なものを何かの形でパターン化する所に成立するのではないか、という二つの批判である。私はこれにこたえるため、「シチュエーションと命題——デューイの質的思考理論をパターン化する試み——(一)」において、パターン化の手がかりを命題に求めようとした。デューイにあって命題

は、一面では探究の中で質の分化としてとらえられ、他面では質から一步抜け出たものとして考えられているので、直接的特殊なシチュエーションの変化(思考の動き)と、間接的一般的な法則との中間にあって、両者の橋渡しをすることが可能だと思われたからである。しかしその論文では主要な関心は、命題を通して思考の微妙な動きを追跡することにあつた。追跡しているうちに、使われている命題のいくつかが必ずしも思考の動きを正確に記述していないらしいということが明らかになり、もとの命題を若干修正する必要があると述べたのであるが、その修正された命題を手がかりとして思考の動きを整理するという逆の方向での作業は、次回への課題として残されていたのである。そしてもっとも期待がかけられたのは、一連の命題を、単称命題、全称命題というように分類し探究の中に位置づけてみるという試みであつた。命題の形式は、探究の

過程で派生し、また何らかの形で探究に貢献するために派生したと  
考えられているのであるから、命題の形式のつながり具合によっ  
て、思考の動きをいくつかの型に分けることができるのではないか  
と思われたからである。そこで今回は、この方向にそって考察をす  
ずめる。

考察に使った例題は、やはり How We Think, revised edition,  
1933 第六章に出てくる三つの例からとったが、今回は、一番目と  
二番目の例を使うことにする。しかしその前に、デューイがあげて  
いる命題の種類を紹介しておく必要がある。

## (一) 命題の種類

デューイが「論理学」(一九三八)の中であげている命題の種類  
は次のようである。(2)

### I 実在的命題 (Existential Propositions)

#### (1) 特称命題 (Particular Propositions)

現在眼の前のものの質的变化を示す。例「これは赤い。」この  
命題は「これ」が現在赤いことを単に述べたのであり、時空を  
超越した真理を述べたものではない。

これは問題の決定における最初の段階を表わす。また他の資  
料と結合して、シチュエーションがどのような種類の問題を提  
供しているかを示すことのできる資料を提供する。またそうす

ることによって、提案された解決を指し示したり検証したりす  
る証拠を提供する。

#### (2) 単称命題 (Singular Propositions)

現在眼の前にあるものが、或る種類に所属することを述べる。

例「これは砂糖である。」「彼は親切だ。」「これらは、「これ」  
「彼」等の不変で信頼できる特徴が確かめられたことを示す。

特称命題と形態の上から区別することは困難であり、前後関係  
の中に位置づけてはじめて、どちらであるかを知ることができ  
る。またこれは、「これ」「彼」が限定されたことを示す。が同  
時に、「これ」「彼」が拡張される可能性を持つに至ったことを  
も示す。なぜかという点、砂糖の場合に例をとっていえば、  
「これ」が砂糖であると断定された途端に、現在「これ」が示  
していない砂糖の他の特長が潜在していることを示すようにな  
るからである。

#### (3) 総称的命題 (Generic Propositions)

種と種との関係を示す命題である。

例、「鉄は金属である。」種と他の種と組織的に関係づけること  
によって、中広い推論が可能となる。

#### (4) 偶然的条件命題 (Contingent Conditional Propositions)

言語的には仮言的でありながら、単称である命題をいう。

例「あれを落とせば、たぶん爆発が起こる」という命題は、偶

然的な結合からなるのであり、また「たぶん爆発が起こる」という或る程度の可能性と同時に「落としてはいけない」という警告を示している。

### (5) 偶然的選言命題 (Contingent Disjunctive Propositions)

「AまたはB」の形に結合されているが、A、Bだけで言いつくされているのではなく、A、Bは偶然的である場合の命題をいう。

例「金属は……か……か……かである。」

## II 全称命題 (Universal Propositions)

### (1) 仮言命題 (Hypothetical Propositions)

例「人間は自由であるときだけ、(その行動が) 正当に非難される。」

同じく *if-then* の形式でありながら、時と所に開わりなく、抽象的可能性を示している所が、前の偶然的条件命題とは異なる。ここにあげた例は、極端な場合には人間が存在しなくなっても成り立つのである。また「もしあるものが物体ならば、それは他の物体をその質量に比例し距離の二乗に反比例する力で見きつめる。」という例に明らかなように、全称仮言命題は論理的には定義(この場合「あらゆる物体は……」というように)の形をとるともいえる。(3)

### (2) 選言的全称命題 (Disjunctive Universal Propositions)

例「三角形は、等辺か、不等辺か、二等辺かである。」

この他に關係命題 (Rational Propositions) があげられているが、これまであげてきた命題はすべて何らかの意味で關係命題といえるので、これは除外してよからう。また「論理学」のこの章ではあげられていないが、数学の命題はその内容が現実のものとは無關係であるという点で独特なので、(4) 数学的命題を区別することにしておく。

### (三) 第一の例題の検討

まず全体の訳をかかげ、次に一文ずつ分類していくことにする。英文はわずらわしいので省略する。

#### 実際の考察の例

「先日、十六番街に居たとき、時計が私の眼にとまった。針が十二時二十分を指しているのを私は見た。このことが、私が一時に百二十四番街に約束があったことを思い起こさせた。私は、路面電車で来るのに一時間かかったから、同じ路を帰ればたぶん二十分おくれるだろうと推理した。地下鉄急行で行けば二十分節約できるかもしれない。しかしそばに駅があるだろうか。もしなければ、私は駅を探すのに二十分以上失うかもしれない。それから私は高架鉄道を思いついた。そして、二街区以内にそのような線があるのを見た。しかし駅はどこだろう。もしそれが私が居る所よりも何街区も先ある

いは後ならば、時間を得るところか損をすることになるだろう。私の心は高架鉄道より早いものとしての地下鉄急行に帰っていった。更に私は地下鉄の方が高架鉄道よりも百二十四番街の私の行きたい所のそばまで行くことを思い出した。そのため、旅のおしまいは時間が節約されることになる。私は地下鉄が良いという結論を下し、一時までに目的地に着いたのであった。」以上。

次ぎには、一つ一つの命題を分析していく。

「先日、十六番街に居たとき、時計が私の眼にとまった。」前半は、単なる質的変化を示しているので特称命題。後半も同じく単なる質的変化を示すので特称命題。ただし、前半と後半のシチュエーションは異なる。後半では、注意の焦点が時計にあり、前半はそのときの状況を説明するためにつけ加えられたものである。

「針が十二時二十分を指しているのを私は見た。」「私は見た」という部分は、まよめの段階でつけ加えられた異質の文であるから除外して考える。「針が十二時二十分を指していた」というのは、針にとって本質的なことではなく、単なる質的変化を示すから特称命題。

「このことが、私が一時に百二十四番街に約束があったことを思い起こさせた。」針の指示が約束を暗示したことを述べ、問題が発生したことを告げている。特称命題。ここでシチュエーションは大きくかわる。これ以下は眼に見えていないものが中心に記述されてい

く。

「私は路面電車で来るのに一時間かかったから、同じ路を帰ればたぶん二十分おくれるだろうと推理した。」おしまいの、「と推理した」の部分は、あとでつけ加えられた部分なので除外する。「私は路面電車で来るのに一時間かかった。」という部分は特称命題であり、続く命題の資料として使われるために回想されたものである。

「同じ道を帰れば二十分遅れるだろう」という部分は思考のプロセスがだいぶ省略されており、もし完全な形に書き直せば、「もし私と同じ道を帰れば一時間かかるだろう。(全称仮言命題)。しかるに13:38-12:20(数学的命題)。約束までには四十分しかない。(特称命題)。40-30-20(数学的命題)。したがってもし同じ道を帰れば二十分おくれるだろう。(全称仮言命題)。」とでもなるであろう。以上のプロセスが一瞬のうちにとどられたのである。ここで問題がはじめて明確化した。記録者はここで、「何で行けば二十分節約できるか(偶然的条件の疑問)」と自分自身に尋ねたはずである。

「地下鉄急行で行けば、二十分節約できるかもしれない。」これも *if-then* の形の命題であるが、結合の可能性はうすいので、偶然的条件命題と判断しておく。「地下鉄急行」という暗示を得たことが、この文を可能にしていることを見落としてはならない。

「しかしそばに駅があるだろうか。」地下鉄急行から、駅の暗示が

得られている。疑問文になっているが、仮りに、特称の疑問としておく。資料を探しているのである。

「もしなければ、私は駅を探すのに二十分以上失うかもしれない。」  
偶然的条件命題。推理および警告を示す。

「それから私は高架鉄道を思いついた。」この文は、高架鉄道の暗示が得られたことがそのまま示されており、特称命題であるが、あとからふり返ってみたときにはじめて書き得る命題であるから、やはり異質のものである。また、この命題の後には「もし高架鉄道でいけば二十分節約できるかもしれない」（偶然的条件）とつけ足すべきであろう。

「そして二街区以内にそのような線があるのを見た。」特称命題。  
「しかし駅はどこだろう。」駅が暗示されて特殊の疑問が作られた。  
「もしそれが私が居る所よりも何街区も先あるいは後ならば、時間を得するどころか損することになるだろう。」偶然的条件命題。警告。

「私の心は高架鉄道より早いものとしての地下鉄急行に帰っていった。」再び地下鉄急行の暗示が得られ、速さがくらべられている。  
特称命題であるが異質。「地下鉄急行ならばもっと早く行くだろう。」（偶然的条件）と書けばふつうである。

「更に私は、地下鉄の方が高架鉄道よりも百二十四番街の私の行きたい所のそばまで行くことを思い出した。」目的地の方の暗示

が得られている。特称命題。「ことを思い出した」の部分は異質であり、除外。

「そのため、旅のおしまいには時間が節約されることになるう。」  
偶然的条件命題。

「私は地下鉄の方がいいという結論を下し、一時までに目的地に着いたのであった。」これは、いわゆる心の中での言葉を記したものはなく、自分の外的行動を記したものである。ここでもシチュエーションは大きくかわって淡々とした描写にもどっている。

かくして思考の流れを、命題の種類という見地から追ってみると次ぎのようになる。省略されている命題はひとまず考察からはずしておく。

特称

特称

特称

特称

特称

全称仮言

全称仮言

偶然的条件

特称の疑問

偶然的条件

特称

特称

特称の疑問

偶然的条件

特称

特称

偶然的条件

特称

特称

このように並べてみて、そこに何かの規則性が得られれば成功なのであるが、残念ながらそのようなものを見つけ出すのは困難である。はじめに特称命題が並んでいて、途中からいろいろな命題が入り混って出て来て、最後はまた特称命題で終わっているというようなことをいえそうだが、これだけでは思考の動きをパターン化するには大まかすぎる。デューイの思考の五局面理論よりも一向にくわしくならないのである。したがって失敗であるといわざるをえない。なぜこういうことになってしまうのであるか。

デューイが思考の五局面理論をひき出したときは、How We

Thinkの中の実際の思考から科学的思考に至る三つの思考の例を並べて、それらの共通要素を抜き出すという作業をしている。当然のことながら、たぶん実際の思考とたぶん科学的思考との違いは

出てこない。(そしてこれが、実際の思考と科学的思考との間には本質的違いはないとする根拠にされている。)ところで、私がここで分析しようとした例題の命題は、記録者が自分の実際の思考をまとめたものであり、そういう意味で一段抽象化されたものである。その命題を更に分類するのであるから更に抽象化が行なわれて思考の個性はほとんど出て来ないことになり、五局面理論と大差ないことになってしまふのである。したがって、もし五局面理論よりも一段実際の思考に接近したパターン化を試みるためには、記録された命題の欠けている所を補って、できるだけ実際の思考に近い形での命題を分析しなければならない。と同時に命題間の時間的つながりも考慮にいれて、デューイの五局面理論を少しでも克服する方向での方策をたてなければならぬ。そういう意味で、背後にかくされていると考えられる命題もとり出して次ぎにいま一度列挙してみよう。なおついでに、各命題が探究の中で果たしている役割りも併記してみる。

#### (四) 第一の例題の再検討

特称——状況説明

特称——状況説明ならびに注意の焦点の決定(焦点化)

特称——状況説明

特称——問題の発生

特称——回想、資料

全称仮言——推理

(数学的——推論)

(特称——資料)

(数学的——推論)

全称仮言——推理

(偶然的条件の疑問——問題の設定、明確化)

(ここで地下鉄急行という暗示)

偶然的条件——仮説

特称の疑問——資料

偶然的条件——推理、警告

特称——厳密には単なる暗示、高架鉄道

(偶然的条件——仮説)

特称——資料

偶然的条件——推理、警告

特称——厳密には単なる暗示、再び地下鉄急行

(偶然的条件——仮説)

特称——資料

偶然的条件——推理

特称——結論

特称——検証

これでこの例題の命題の排列の規則性はかなり明確になってきたが、より一層明瞭にするため、次ぎのような記号化を試みてみよう。

特称 P

単称 S

類称 G

偶然的条件 C

偶然的選言 D

全称仮言 H

数学的 M

疑問?

否定 N (目立たせるために一段下げて書くことにする)

主要な暗示の発生 O (目立たせるために一段下げて書くことにする)

そして今一度列挙してみる。

P 状況説明

P 状況説明

P 状況説明

O 約束

P 疑問の発生

P 資料

H 推理

(M) 推論

(P) 資料

(M) 推論

H 推理

(P?問題の設定、明確化、「何が時間を二十分節約するか」

O 地下鉄急行

C 仮説

P?資料

C 推理、警告

N

O 高架鉄道(原文ではP)

(C) 仮説

P 資料

P?資料

C 推理、警告

N

O 再び地下鉄急行(原文ではP)

(C) 仮説

P 資料

C 推理

P 結論

P 検証

右の表を見ると、命題の排列のいくつかの規則性が予想できる  
のであるが、そのもっとも大きなものは、問題が明確になるまで  
の間は、いろいろな命題が不規則にあらわれるが、一たん明確化し  
てしまうと、そのあとに出てくる命題にはかなり整然とした規則性  
がみられることである。つまり

P?問題の設定のあとに

O

C

P (数は不定)

C

N

がくり返しあらわれるのである。しかしこのことは、この例題だけ  
の特殊性かもしれないので、更にもう一つの例題の分析を試みてみ  
よう。この例題は同じく How We Think の中に先の例にすぐつ  
づいてのせられているもので、「観察に基づき反省の例」という見  
出しがついている。分析の仕方は、前と同じである。

(五) 第二の例題の検討

まず全訳をかかげる。



「私が毎日川を渡っている渡し船の上甲板からほとんど水平に突き出て長い白いポールがあり、その先端には金色に塗った玉がついている。私をはじめそれを見たとき、それは旗竿を暗示した。その色、形、金色に塗った玉がこの観念と符合した。そしてこれらの理由が私のこの信念の正しさを証明するよう思われた。しかしまもなく困難が生じた。ポールはほとんど水平であり、旗竿にしては妙な位置だ。第二に、旗をとりつけるための滑車も、輪も、綱もない。最後に、他の所に、ときどき旗が下がっている鉛直の竿があった。そのポールは、旗を掲げるためにそこにあるのではないらしいと思われた。

私はそれから、そのようなポールの可能な使用法を全部想像してみようとした。そしてその中のどれにこのポールが最も適合するかを考察してみようとした。(a)たぶんそれは飾りであろう。しかし渡し船のすべてにはポールがついており、引船にさえポールがついているのであるから、この仮説は拒否された。(b)たぶんそれは無電の端子であろう。しかし前と同じ考察が、このことをあり得ないことにした。加うるに無電の端子ならば船の一番高い所、操舵室のてっぺんにあるのが、より自然であろう。(c)そのポールがある目的は、船が進んでいる方向を示すためのものであるかもしれない。

この結論を支持するものとして私は、そのポールが操舵室より低くなつていて、舵手がた易くそれを見ることができるようになつて

いることを発見した。更に、先端はつけ根よりも程よく高くなつていて、舵手の位置からはそれが船の前方に遠く突き出て見えるに違いない。更に、舵手は船の前方に近い所にいるのであるから、彼は方向について何かそのような指示物が要るに違いない。引船もそのような目的のためにポールを必要とすることだろう。この仮説は他の仮説よりも非常によさそうなので、私はこれを受け入れた。私は、ポールは舵手がまちがいがなく舵をとれるように舵手に船の向かつている方向を示すためにとりつけられているのだ、という結論を作りあげた。」以上。

次に前と同じ要領でこの各々を分析してみる。

「私が毎日川を渡っている渡し船の上甲板からほとんど水平に突き出て長い白いポールがあり、その先端には金色に塗った玉がついている。」原文は後半は分詞構文になっているが、独立した文章として扱うと、特称命題——状況説明、特称命題——状況説明である。問題はまだ発生していない。

「私をはじめそれを見たとき、それは旗竿を暗示した。」訳文の前半は特殊命題——状況説明。後半は問題が多い文である。原文は *It suggested a flag-pole.* となつているが、特称命題(厳密には単なる暗示)とは割り切れない所がある。なぜかというところ——旗竿の暗示のつながりは、「実際の考察の例」に出てくる地下鉄急行——駅の暗示のつながりとは種類が違ふからである。後者では、

暗示するものとされる物とは並列関係にあるが、前者では、ポールと旗竿は含み含まれる関係にあるように思われる。あるいはより正確には、一方が他方を代表する関係といった方がいいかもしれない。それは、この原文の後に It may be a flag pole. と書き足してみるとはつきりする。これはまさしくデューイのいう単称命題である。そこでここでは元の文を It suggested that it might be a flag pole. と考えて、単称命題——仮説と位置づけておく。問題が発生しないのにいきなり結論（の仮説）が出てくるのは変であるが、かすかに発生したのであろう問題が、省略されて表現されていない、と考える。

「その色、形、金色に塗った玉がこの観念と符合した。そしてこれらの理由が私のこの信念の正しさを証明するように思われた。」特称命題——検証、特称命題——説明。ここで問題は一時、解決したかのようである。

「しかしまもなく、困難が生じた。」特称命題——問題の発生。これはあとからつけ加えられた異質の文であるが、いちおう命題の中に加えておく。

「ポールはほとんど水平であり、旗竿にしては妙な位置だ。」特称命題——資料、偶然的条件命題——推理。否定の予言その一。

「第二に、旗をとりつけるための滑車も、輪も、綱もない。」滑車、輪、綱という語が唐突にあらわれるが、この文の前には当然、「も

し旗竿ならば、滑車と輪と綱があるはずだ」という、偶然的条件命題——推理が省略されているはずである。そして本文のこの文自体は特称命題——資料である。やはり否定を予言し、否定の予言その一となる。

「最後に、他の所に、ときどき旗が下がっている鉛直の竿があった。」特称命題——資料。この文の後には、「旗竿ならば、そう何本も必要ないはずだ」という偶然的条件命題——推理が省略されていると考えられる。否定の予言その三である。

「そのポールは、旗を掲げるためにそこにあるのではないらしいと思われた。」そのポールは旗竿ではないらしく思われた」と書き直して考えて単称命題の否定——結論。仮説が不適切であることを示す。この後には、「このポールはいったい何であるか」という単称の疑問がかくされていて、これが明確化された問題である。

「私はそれから、そのようなポールの可能な使用法を全部想像してみようとした。そしてその中のどれにこのポールが最も適合するかを考察してみようとした。」つまり、ポールから暗示されるものを全部列挙してみようという企てがなされたことを示す。探究の方法論を述べたものとして独特な位置づけをもつと思われるが、あとでつけ加えられたものかもしれない。このことがこの段階で実際に考えられたのなら、こういう命題を示す記号が何か工夫されるべきである。特称命題——方法論、特称命題——方法論。

「(a)たぶんそれは飾りであろう。」単称命題——仮説。もちろん飾りが暗示されたことを意味する。

「しかし渡し船のすべてにはポールがついており、引船にさえポールがついているのであるから、この仮説は拒否された。」この文の前には、「もし飾りならば、すべての船が持っている必要はないだろう」という偶然的条件命題——推理が省略されていると考える。本文の原文は、引船にさえポールがついているのであるからの部分までが一文になっており、特称命題——資料。終わりの文はやはりあとからつけ加えられたものであり、実際に探究しているときには「ポールは飾りではない」という単称命題の否定——結論であるはず。

「(b)たぶんそれは、無電の端子であろう。」単称命題——仮説。

「しかし前と同じ考察が、このことをあり得ないことにした。」この文自体は特称命題——結論であるが、この文を書いた人が前と同じ手順を踏んでこういう結論に達したと述べているのであるから、偶然的条件命題——推理、特称命題——資料、単称命題の否定——結論、というように考えて差し支えなからう。

「加うるに、無電の端子ならば船の一番高い所、操舵室のてっぺんにあるのが、より自然であろう。」偶然的条件命題——推理、このあとに「のに、そこにはない」特称の否定——資料を補う。

「(c)そのポールがある目的は、船が進んでいる方向を示すためのも

のであるかもしれない。」単称命題——仮説。

「この結論を支持するものとして私は、そのポールが操舵室より低くなつていて、舵手がた易くそれを見ることができるようになっていることを発見した。」特称命題——資料。この背後には、「方向を示すポールならば操舵室より低くなっているはずだ。」という偶然的条件命題——推理がかくされている。

「更に、先端はつけ根よりも程よく高くなつていて、舵手の位置からはそれが船の前方に遠く突き出て見えるに違いない。」特称命題——資料。背後には、「もしこれが方向を指示するポールならば、当然そうあるべきだ」という偶然的条件命題——推理がかくされている。

「更に、舵手は船の前部に近い所にいるのであるから、彼は方向について何かそのような指示物が要るに違いない。」特称命題——資料、偶然的条件命題——推理、検証。

「引船もそのような目的のためにポールを必要とすることだろう。」偶然的条件命題——推理。ここで前に述べた「引船にさえポールがついている。」特称命題——資料が想起されているはずである。

「この仮説は他の仮説よりも非常によさそうなので、私はこれを受け入れた。」探究が一応終結したことを示している。特称命題——説明。

「私は、ポールは、舵手がまちがいがなく舵をとれるように舵手に船

の向かっている方向を示すためにとりつけられているのだ、という結論を作りあげた。」「私は」と「という結論を作りあげた。」とは、あとでつけ加えられたもの。この本文の目的は、ボールがとりつけられたという動作よりも、ボールが方向指示をするためのボールであるという目的に比重がかかっていると考えて、単称命題——結論としておく。

さてこの第二の例の中に現われた諸命題とそれが問題解決の中で果たしている役割りを前と同じ要領で列挙してみると次ぎのようになる。ただし今回は、背後にかくされていると思われる命題も、かっこなしであげておいた。

- P 状況説明
- P ..
- P ..
- O 旗竿
- S 仮説(ボールは旗竿である)
- P 検証
- P 説明(本当らしく思われた)
- P 問題が発生したことの説明
- P 資料
- C 推理
- N<sub>1</sub>

- C 推理
- P 資料
- N<sub>2</sub>
- C 推理
- P 資料
- N<sub>3</sub>
- S N結論
- S? 問題の明確化(ボールは何であるか)
- P 方法論
- P 方法論
- P 方法論
- O 飾り
- (a)
- S 仮説(ボールは飾りである)
- C 推理
- P 資料
- S N結論
- (b)
- O 無電の端子
- S 仮説(ボールは無電の端子である)
- C 推理
- P 資料
- S N結論
- C 推理

P N資料(前の結論のダメ押し)

(c) O 進路指示棒

S 仮説(ポールは進路指示棒である)

C 推理

P 資料

C 推理

P 資料

P 資料

C 推理、検証

C 推理

P 資料

P 探究が終結したことの説明

S 結論

この表を、第一の例題の分析で作った表と対照しながら眺めてみると更にいろいろなことがあるいは仮説として、あるいは問題点として指摘できそうである。次にこのことを(六)および(七)で述べて、本稿の結論にしたいと思う。

(六) 若干の仮説

1 各種命題の個々の働らきに関しては、かなりはっきりした規則性が認められる。(たとえば状況説明は特称命題が多い。資料も

特称命題が多い、という具合に。) デューイはそもそも命題は探究を助けるための手段として分化してきたのであるから命題をその働らきの上から区別するべきだと提案し、次ぎのように述べている。

「……手殺そのものは真でも偽でもないから、真偽は命題の特性ではない。手段は効果的であるか効果的でないかのどちらかなのである。適切であるか無関係であるか、無駄か経済的かなのであり、その違いの基準はそれが手段として結びついているところの結果の中に見出だされる。」(5) 本稿の命題の種類に紹介しておいたのは実はこのような見地に立脚しての分類であった。特称命題から数学的命題に至る一連の命題は、探究の行為が前進する諸段階を表わすものとして示されていたのである。この分類を受け入れて試みた命題の分析が、結果としてデューイの持論を実証することになったというの当然といえは当然である。一例をあげれば、「ジョンは走る(John runs)」という命題は伝統的分類法にしたがえば一度「ジョンは走る人である」(John is a runner)」という命題に書きかえて、含み含まれる関係の命題の中に入れてしまうのであるが、デューイはこれに反対する。「ジョンは走る」という命題は、ジョンが走るのを職業としている人間であるという判断を下しているのではなく、ただ単にジョンが走るという状況説明をしているのだとして、特称命題の中に入れる。(6) したがって特称命題の働らきとして状況説明が多くても不思議はなく、そうなることは最初からわ

かっているのである。こういうわけで、各種命題の個々の働らきを論じてもデューイの説以上に出ることはむずかしいと思われる。そのためこの点ここではあまり問題にしないことにして、もっぱら命題間のつながりの方に注意を向けてみる。

2 第一例のはじめから PPP OPP HMP MHP? まででは問題が生じてから問題が明確な形で問われるまでの苦悩を示す。前にも述べたようにこの中に含まれる規則性の有無は不明である。第二例の方は、はじめから PPP OS PPP C<sub>1</sub> CP N<sub>2</sub> PC N<sub>3</sub> SN までではやはり問題が発生してから問題が明確化するまでの思考のプロセスを示す。この方はやや規則的であり、問題が明確化してからの思考の動きと類似していることが目立つ。したがって第二例の方は問題が発生してから解決するまでの思考が同一線上にあったことがわかる。

3 どちらの場合にも、一たん問題が明確な形で問われると、とたんに思考の動きに規則性が出てくることが顕著である。それは第一例にあっては

C 仮説

P 資料

C 推理

N

というサイクルであり、第二例にあっては、

O

S 仮説

C 推理

P 資料

SN 結論

というサイクルである。

このうち P 資料、C 推理は両者に共通だから、両者の違いは、もしあるとすれば、第一例における C 仮説と第二例における S 仮説の違いにあると思われる。そこでその正体を調べるためにこれらの命題の中味を見てみると、第一例の C 仮説は「地下鉄急行は時間を二十分節約するだろう。」という内容を持っており、第二例の S 仮説は「ポールは飾りである。」「ポールは無電の端子である。」という内容を持っている。こうしてみると両者の違いは、探し求められているものの論理的位置の違いであることが明瞭である。つまり第一例にあっては明確化された問題は特称命題の疑問「何が時間を二十分節約するか」であり、「　は時間を二十分節約する」という文のつまり文法上の主語にあたる部分が探し求められているのであるから、それに答えるものとしての仮説は必然的に条件命題になるものと思われる。これに対して第二例にあっては明確化された問題は単称命題の疑問「ポールは何であるか」であり、「ポールは　であ

「る」という文のつまり文法上の述語にあたる部分が求められているのであるから、それに答えるものとしての仮説は必然的に単称命題になるものと思われる。もしこの考えが正しければ、問題が特称命題の文法上の主語を探し求める形であらわれるときには思考は常に

O 暗示

C 仮説

P 資料

C 推理

N

をくり返し、Nが消えるまで続くことになるだろう。(また問題が特称命題の文法上の述語を探し求める形であらわれるときには、前のC仮説のかわりにP仮説を入れればよい。)問題が単称命題の文法上の述語を探し求める形であらわれるときには思考は常に

D 暗示

S 仮説

P 資料

C 推理

N

をくり返し、Nが消えるまで続くことになるだろう。(また問題が単称命題の文法上の主語を探し求める形であらわれるときには、S

仮説のかわりにC仮説を入れればよい。)

このようにして、いったん問題が明確な形であらわれてしまえば、思考は満足のいく答えが得られるまで、同じサイクルを反復するらしい、ということが、今回のたった二つの例題の分析から予想される。この仮説があたっていれば、実り多い思考の一つの規範となり得るかもしれない。

もっともこの程度のこととはわざわざ命題の分析などやらなくともちよっと考えればわかることではあるが、それがより明確な形をとって現われたという点を、今回の分析の一応の収穫としてあげておく。

### (七) 残された問題

しかしこのたった二つの分析例から出てくるのは積極的な仮説よりも、むしろ疑問の方である。

1 まず、ここにとり出された命題の流れは、どの程度でもいいが、とにかく実際の思考の姿を示しているだろうかという根本的疑問がある。またもし実際の思考の姿をいくらかでも示していると考えられるなら、それをどうやって証明するかという問題もある。しかし正直に言って今の私にはこれに対して十分な答えを出せる自信はない。ただ、実際の思考とO C P C Nのサイクル等によって示されたものとは別の世界に属するものだということはいえる。別の世

界に属してはいるが、一方の世界内での個々の事象の位置関係が他方の世界内での個々の事象の位置関係に対応しておればそれで十分なのではないか。それならば両者が対応していることはどうやって示すかという疑問がきつと出されると思うが、それに対しては、これらからの仮説をもとに理論を構築していつて、何らかの形で思考の問題を扱う際の助けになり、また何の不都合も生じなければ、両者は対応していると考えていいのではないかと答えておこう。

2 問題が明確化するまでの思考の動きの問題がある。問題を明確な形で設定することがその後の思考を規制して行くことは予想できるが、問題を明確にする際の思考の動きはまだまったくつかめない。更に、問題が明確になるとはどういうことか、という問題も残る。これらの問題に答えるには、分析例が少なすぎる。

3 S 仮説とかC 仮説とかいったが、その思考の正体は何なのか。いくつかの違ったサイクルをあげることによって、違うということは表わしても、どう違うかまでは表わせない。これは1であげた根本的問題にもかかわるが、いつかはどう違うかまで踏み込んでいくのでなければ不満である。

4 同じくC 仮説といつても、仮説を作る可能性をもつものがごく少数に限られていて誰にでも思いつけるような場合と、そうでない場合とは実際の思考の性格はかなり違ってくると思われる。これは暗示の問題である。今回分析した例では、第一の例題では利用

できる乗り物を全部検討すればすむことであつて（偶然的選言命題になる）、比較的単純であるからはっきりしたパターンが出たとも考えられる。この乗り物から他の乗り物が暗示されるのは容易なはずである。ただし、なぜバスやタクシーが検討されなかったかは不明である。

5 命題を分類する際に使われる命題の種類は今のままで十分か。一例をあげれば、「先日、十六番街に居たとき、時計が私の眼にとまった。」という文を仮りに二つの文として分けて考えると、前半の文と後半の文とは我々が受けとる感じが違うのである。前半の文はのんびりたんたんとしているが、後半の文には或る種の緊張が感じられる。注意の焦点が定まっているからである。しかしこれを命題の種類ということで分類してしまうと、いずれも特称命題となつてしまつて微妙な変化が出てこない。思考のパターン化とつてはこの微妙な変化がかなり重要なはずであるから、これは不十分なことといわなければならない。もし命題というものがデュイのいうように探究を推し進めるのにプラスになるように形式化されていくものならば、このような微妙な変化も客観的に表現できる言語形式がほしかったように思う。こういう問題は他人にまかせておかないで我々がこれから工夫するということも、大いに考えられることである。とにかく命題の種類が我々のデリケートな感情に対応して豊富にあるのでなければ、思考の種類即命題の種類と考えるわ



けにはいかなないのである。命題のつながりがこの不満をカバーできるかどうか残された大きな問題である。

6 眼の前に見えてあるいはきこえて(にあって etc.) いることを述べた命題と、想像されている命題との区別の問題がある。デューイは探究は資料と観念の働らき合いによって進むといっているが、だいたいこのことと対応しているように思われる。しかしこれを明確に区別するには技術的になりたいへんむずかしい問題があることはちよつと検討してみるとわかることである。

7 パターン化されやすい探究と、されにくい探究の問題がある。今回の分析でかなり明確な形で結論を出せたのは、二つの例題が単純だったからであり、また似通っていたからである。同じ How We Think 第六章に並んでのっている第三の例題の場合になると、こう単純ではない。その例題は、「実験を含む探究の例。湯にとかした洗ひ粉でコップを洗い、それを板の上に伏せて置いていゝるうちに私は、アワがコップの口の外側に現われ、次いで内側に吸い込まれていくのに気がついた。なぜだろう?」という具合に展開していく。探究はこの「なぜだろう?」からはじまり、いろいろの仮説をたてて検証するという形で展開していく。しかし仮説のたてかたは決して前二例におけるように素直にはいっていない。したがってもしこの探究の中に思考のパターンを探るとすれば、相当の困難が予想されるのである。またもしこれがあつさりした形でまとめ

られたとすれば、かえってそれは複雑な思考の動きを写しとつていないとも考えられる。

8 実際の思考と、命題による記述の関係という問題もある。いま手もとに小学校四年生の文集があるが、次ぎのような文のっている。これは思考のプロセスを記述したものではないが参考になる。

### 火事

「夕はんを、たべおわつてから、おとうさんがテレビを見ていると、ドカーンと音がしたので、おとうさんが、カーテンをあけてみると、となりのとみ山さんのうちがまっかなので、よくみてみるとトタンがまっかにもえていました。おとうさんが『となりのうちが火事だ。』というのでわたしもまどからみてびっくりしてげんかんへとんでいきました。その間にしばた(注、新発田)からきているしんるいのおばちゃんが、しょうぼうしよへ電話をしました。(以下この調子で火事の模様を描写している)」

これなどは話がごたごたと前後しているが、この作文を書いた子供の意識が実際にこういう具合に動いたのか、あとでふり返つてまとめるときの叙述がゴタゴタしたのか不明である。今回分析した二つの例題は非常にすつきりしていたが、これは大人と子供の思考の差なのか、それともふり返つてまとめるとめる段階になつての手ぎわの差なのかはつきりしない。我々の誰もが、自分の思考のプロセスを何

かに書く際に、実際の思考にほぼ忠実に書いたつもりでも、きれいにまとまりすぎるくらいがあるということを経験しているはずである。しかし実際の思考は、ふり返って思い起こすことを許さないほどゴタゴタしているように思えるのである。一度明確な結論を出してしまおうと、思考はもとの姿にはもどれないということも考えられる。だとすると、思考のプロセスの記述を手がかりにするといういき方は、実際の思考の動きは決してとらえられないということになり、「二回限りの思考」の強調に逆戻りしてしまう。しかしこれは反対に、あるていど不正確ではあっても実際の複雑な思考を抽象しているからかえって、思考をつかむ手がかりが得られるのだとも考えられ、私はその方により多く期待をかけてみたいように思う。

疑問ばかり続出する試みではあったが、次回はこれらのことを念頭において上でより詳細な分析を試みてみたい。

註

- (1) 教育哲学研究第17号
- (2) 第十五章
- (3) J. Dewey: *Logic, The Theory of Inquiry*, 1938, p. 272.
- (4) *ibid* Chapter XX.
- (5) *ibid*, p. 287.
- (6) *ibid*, p. 297.
- (7) デューイのものの考え方には特色がある。それは、どんなこ

とを考える場合にも、「その本来的働らき」という点に注目することである。学校の問題を考える場合でも、宗教の問題を考える場合でも、その本来的働らきは何か、はたしてそのものがその本来的機能を維持しているかを問うてみるのである。これはプラグマティズムの考え方であるといっている。

この考え方は論理学理論にも適用される。論理学とは本来探究を推進させるべきものである。命題のいるいるな種類も、探究への異なった貢献の仕方に対応して生まれた。我々は論理学をもっと探究と密着したものとして考えなければならぬ、というのが、彼の“*Logic: The Theory of Inquiry*”, 1938の主張である。